

『絶望の国の幸福な若者たち』

著者 古市憲寿氏にインタビュー

——20代の約7割は現在の生活に満足している、という内閣府の調査結果が意外です。就職難や世代間格差などの問題が山積みだというのに、若者は本当に幸福なのですか？

ええ、20代の僕自身、「幸せだよね」と思っています。今の若者はなにかにつけ不幸だと言われてきましたが、史上最も豊かな消費社会にあつて、当事者の多くはまあまあ満足しているはず。むしろ日本の中で幅を利かせている若者不幸論のほうがおかしいと感じて、この本を書きました。

——一方、日常生活に不安を覚えている20代も増加中だとあります。

その理由は、不況や不透明な社会環境も大きいですが、若者の悩みのメインである友人関係に求められます。小さな規模の「仲間」と「今ここ」を楽しむことにすぐく価値を置いていて、それが幸せにもつながるし、不安要因にもなりえるわけです。ただ、例えば大学生だったら、大学のサークル、ゼミ、バイト、ダブルスクールの予備校、地域のNPOなど、仲間を作れる場がいろいろあります。ひとつの場にとらわれず、自由に行動し、さまざまなコミュニティに参加する人たちも増えていると思います。

——もう少し下の年代に関しては、どうでしょうか。

実は、より高い幸福度の結果が出た中高生向けの調査が複数あります。その要因は友人関係の比重が20代の場合以上に大きいことです。単純に友人の数が多

『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社 1800円+税

格差社会の受難者として、あるいは「〇〇離れ」している困った連中とばかり言われているイマドキの若者たち。しかし、実態は違うのではないだろうか。26歳(執筆当時)の若き社会学者が、あらためて統計を検証し、フィールドを徹底調査する。経済成長が止まってしまった国で、若者の向かう先を探る。
(2011年9月初版発行)



い人ほど生活満足度が高くなっている。また、実際にあまり友人がいない人でも、所属しているならかかグループ内で自分は幸福だと思わざるをえないような空気感がある。自分に対する承認が担保されていれば、それで良しとする感覚

です。

——むりやり自分を納得させている？

むりやりなのか、自然に納得しているのかはグーデーションでしょう。その是非はともかく、こうした人間関係のあり方は高度経済成長期が終わった1970年代以降、基本的に変わっていないと思います。社会がどうであろうが、自分は半徑数メートルの世界の中で生きていける、といった幸福感。若者は長いこと不幸だと感じていない、のです。知識人やマスコミが根拠の薄い若者論を、その時々で勝手に展開してきた面があります。

——高校の先生方に伝えたいことをお話しください。

制度の問題なので先生方に言っても仕方ない話ですが、高校の授業時間数は多すぎると思います。大人になると、自分の専門分野以外の学習内容はほとんど覚えていませんよね。ならば、週3日登校くらいでもいいのではないのでしょうか。そして、空いた時間をさまざまなコミュニティを渡り歩く訓練に当てるのです。終身雇用的な働き方が難しくなってくる時代では、多様な場で生きられる力が問われます。だから、「生徒をあまり学校だけに縛りつけないでください」とお願いしたいと思います。

古市憲寿氏

ふるいち・のりとし●1985年東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程在籍。慶應義塾大学SFC研究所訪問研究員(上席)。専攻は社会学。有限会社セント執行役。著書にピースボートの世界一周クルーズをフィールドワークした『希望難民ご一行様』、共著に上野千鶴子氏との介護問題をめぐる対談『上野先生、勝手に死なれちゃ困ります!!』(共に光文社新書)などがある。

